

回 顧

川崎千束

東京家政大学の付属幼稚園は昭和廿八年六月に、学長青木誠四郎、園長山下俊郎という心理学の二権威によって創立されました。当時のキャンパスには、檜・椎の樹々が六百本近く茂り合い、垣根には枳殻が廻らされていました。私は又とない環境に感謝して、幼児たちを、この有難い自然に融けこませ、豊かな遊び心を育てて、このびとした保育であらしめたいと念願しました。

開園してから二年目かに、理事長室に呼出され、「孫



の通っている〇〇幼は（有名な私立幼）いろいろのことを教えてくれるので、母親たちは大変よろこんでいる。しかるに、この理事長室から見ていると、ここの園は遊んでばかりいるようだ。〇〇幼を見習ったらどうだ」と、とがめられ、「ハイ」と、引き退ってくればよかったものを、

「〇〇幼は〇〇幼の方針でしょうし、ここの園は家政大付属としての方針の保育です」と見得を切ったおかげ

で、爾後、幼稚園の予算の通り工合が悪く困惑しました。

保育修了式の案内状に、その理事長名を先に、園長名を後に記すようにも言われましたが、園長名だけの案内状にしました。当時、大学の入卒の案内状は、理事長・学長の順の連名のものでした。現在は、学長名だけに修正されています。

然し、この理事長に言われたことは、当時の私の深い悩みでありました。理事長は銀行の支店長を歴任して理財には長けていても、教育面では門外漢でしょうから、その言葉は聞き流されたのですが、園長の山下先生は、私の保育方針を諒として許されているのか？

学園広報などには「倉橋先生の教え子であることで一も二もなく来てもらった」と記されているものゝ、それを文字通りに受け取ることは、躊躇されるものがありました。

山下先生は寡黙の上に、保育の実践については、何ひとつ容喙も指導もされませんでした。更に私の悩みを倍

加させたものは、山下先生の教え子の児童学科卒の同僚の言動でした。「保育は牧歌的でなく科学的でなければ」と一にも二にもデータとりに熱心だったからです。

その頃、倉橋先生の保育理論を牧歌的だと評するむきもあったようです。それに心理学の隆昌は、まさに燎原の火の如く、山下先生は次から次へと、心理学の本を出版されました。ゲゼルの訳著から始まり、幼児心理学・教育的環境学・幼児の心理発達・ひとりっ子の心理と教育・児童心理学・家庭教育、等々。それらが出版される度に、先生の著書を味読し、その理論の勉強に努力しました。著書はどれも理路整然としている上に、平易な言葉で叙述されているので、浅学の私にも理解が可能でした。

私が倉橋先生の講義に魅せられたのは、

「一般の仕事は、外に向ってのみ行われるのでもすむ。教育は、そこが全く違うのである。先ず、内へ向かっての教育なくして、外へ向っての教育はあり得ない。

教育の必要性を、それぞれの方面と部面とに於て、いろいろに主張する論もある。

しかし、人間を人間へ教育するということは、われ等の一日一刻も忘れてはならないことである。われ等の責任感の発露も帰結も、此の教育大本の自覚によって始めて厳かである。子どもと共に嬉々としてあそび暮しつつ、人間教育の厳かさに生きるもの、それが幼児教育者である」にあるのです。

私は明治の終りから大正にかけて、誠に味気ない幼稚園生活をすごしました。その二年間先生とも友達とも遊んだ記憶はなく、登園から降園まで、会集に始まり、フレールベルの恩物と手技と唱歌というぎっしりつまったプログラムで管理され、不得手な手技に悩まされ童話も一度もきいたことがなく、今、記憶に残っているものは、母が話してくれた昔噺ばかりです。このように、幼児としての時間と空間が与えられなくて、何で健全な精神発達をするでしょうか。私はこの時期の保育に根ざした私の性格面のマイナスを今も残念に思っています。

保育科に入学して、フレールベルの偉大さも哲学的なことも、倉橋先生の講義によって識り、若い心は、自分なりの保育の理想に燃え立ったものでした。

山下先生も、著書の中で

「幼児の生活は、すべてが遊びであり、そのあそびには、非常に多くの心身の働きがふくまれ、中心となっている心の働きは複雑なこみ入ったものである」と記されていますが、研究熱心な同僚は、こどもの遊びも、

1 感覚を働かせて、たのしみを呼び起こす。

2 手足の運動が楽しみをもたらず。

3 周囲の生活を模倣することを楽しむ。

4 絵本・レコード等の受容あそびを喜ぶ。

5 組み立て、砂場、絵を描くなどの構成あそびを好むようになると分析します。

こうなのが科学的なのかと、私は戸惑い続けました。

ある夏の休暇中、愛育研究所の斉藤先生が大学へ講演

に來られて、幼稚園にも立寄られた時、園舎を案内された山下先生が、

「何もしておりませんので」と恐縮氣味に語られた。先生は、どういう意向でこの言葉を言われたのだろうか。

單なる社交辭令か、それとも、心底、何もしていないと思われての言辭なのか。私は園庭の遊具の一つ一つにも、風物的と機能的の兩面から慎重に考へて設置している筈なのに。私のこの低迷する心を、慰め、はげましてくださったのは、故山下治子夫人でした。「先生を信頼しているのですから、思い通りにおやりください」と。

毎年の園児募集は定員の四・五倍の応募がある一方、働きの人も幼教一級の免許を取得した若いひとたちと世代交替になり、このひとたちは、在学中に得た保育とは、という定見を持って子ども達に接しました。倉橋先生の、子ども達と楽しく遊び得る人は偉い人であるを、そのまま実践し幼稚園は好ましい雰囲氣に包まれました。私は今もこの時期の若い働きびとに感謝の念を持ち続けています。

晩年の山下先生は、保育の方法は、間接的で且つ生活的でなければ、と強調されるようになりました。このことは先生にとって、喜ぶべきか、かなしむべきか、私は複雑な氣分になりました。

とあれ、子守りのな保育を、心理学に基いて、教育体系に確かな位置づけをされ、保育学会会長として、心理学を台頭させ、多数の著書は版を重ね力漲っていた壮年から晩年は円熟の域に達せられたとみるべきでしょう。

昨夏、高二の代表三名が私宅を訪ねてきて、来夏は受験体制に入るので、今夏中には是非幼稚園の同級会を催したいとのことで、暑いさ中、水上バスで隅田川を溯って十六名出席の（同級生廿二名）クラス会になりました。

その時、幼稚園でよく遊んだ。キャンパスで拾った椎の実のは炒ると美味しい。雨蛙採りにも行つた。箱根の寮に泊つた夜のお化けごっこ。キャンパスで先生にも知らせなかつた冒険の樹。枳殻垣根の黄アゲハ蝶の卵を度々羽化させた。銀ヤンマも。あれは見事だつた。夕暮に、

明治神宮の内苑で埒にかえる鳥の群れを見に行った。あの時原宿駅に迎えに来たお母さんの顔がやさしく見えた
つけ等々。話題はつきませんでした。

最近の来信の一つに、

大学に入学、法律を勉強することになりました。私立
高校の三年間が私にとって、とてもプラスだったこと、そして自由だったことが思い出されます。高校の他にも、どこかで同じような経験をしたなあと思います。それが幼稚園での生活でした。私の記憶の中で不思議とはっきり思い出されます。それはきっと、毎日が楽しく充実していたからでしょう。（後略）

オーストラリアのマイヤーズ幼稚園を朝の八時半頃訪問しました。玄関先にカーペットを敷いて、その上で柔かい陽をうけて、先生を中心に子ども達が、先生の膝にもたれたり、肩に寄りかかったりして、何やらガヤガヤ言っています。通訳によると、一週間ほど前に屋根で孵って、屋根から落ちた鳩の雛を育てているとのこと

で、先生が小さい嘴を開いて餌付けをされている、その手許を子ども達がのぞきこんで、話し合っているのです。

この平和な一幅の絵を見るような光景は、いつまでも私の心象に残っています。この園の子ども達は、それぞれが遊びを創造していて、どの顔もどの瞳も輝いています。本当の保育がここにあると深く感じました。津守先生も廿年先のこの子達が期待されると、話していられた。

草と風とがたわむれているような日本の五月の原っぱで、七・八人の女の児が車座になっていて、その中心に、学校を出たての若い先生が座っています。若い先生はナズナの花で、ひとりひとりにかんざしを作ってやり、カヤツリ草で蚊帳を吊ってやったりしています。子ども達は「先生、作って。作って。」とねだっていますが、先生も楽しそうな笑顔です。私は幼稚園雑草の中の「子どもと遊べるひとは偉いひとである。子どもと一緒に楽しむひとは、更に偉いひとである」という言

葉を思い出しました。

現在の幼児の経営者の中には、このような得難い先生を、おっとり型として拒否する傾向があるのを憂えます。何事も短絡的で、水際立つような保育を母親たちが満足すると考えているからでしょうか。

泣く

周郷先生が、お茶大付属幼稚園の園長先生の頃「いやになっちゃうね。入園式に泣きもしないんだから」と、話されたことがあります。私は、新入園児を迎える度毎に「泣く子がいませんように」と祈りました。

「泣くのが当り前だよ。大人だって、いきなり集団の中に入れられたら、泣きたくなるじゃないか」しかし私は、周郷先生は園長先生だから、そのように仰しやられるのであって現場の者は、あちこちで泣かれたら、途方にくれてしまうものをと心の中で反発しました。

ある時、ひとりの母親の手記を読む機会があり、私が職業馴れしてしまい、ナイーヴさがなくなつて傲慢でさ

えある事に気付いて深く恥入りました。手記は次のようです。

下の子をおんぶして、しのと手をつなぎながら、私は今日はじめて、この子と別々の行動をするのだと思いました。

生れてから今日まで、いつだって、手のとどくところにしか、離れることのなかったわが子です。

この篤い母親の心を慮らないで、泣く泣かないなどと、身勝手なことだけを考えていた浅はかさ。その子どもたちを受け入れるということは徒や愚かであつてはならない。謙虚な心で、この子ども達と結ばれるえに、しの厳かさを、しっかりと受け止めなければ、人間を人間へ教育することはできないのだと悟らしてもらいました。

（元家政大学付属幼稚園）